

時の概念：曜日と時計の教え方

2019.1.20 札幌定例会

藤坂龍司

1. 時の概念を教える順番

朝・昼・夜

曜日

きのう・きょう・あした

時間（時計）

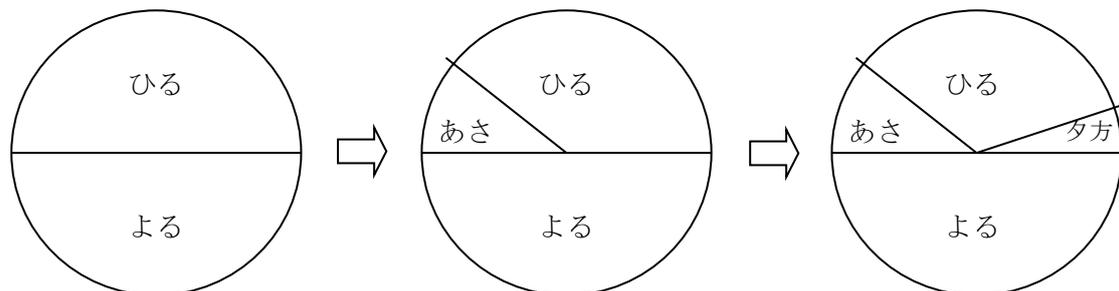
日にち

季節

年

2. 朝・昼・夜

<教える順番>



<昼と夜>

3歳になったら、朝、昼、夜を教えよう。

まず1日を昼と夜に二分する。「明るいのが昼。暗いのが夜」と教える。

「明るい・暗い」の区別がわかっていることが前提。

屋外のいくつかの場所（駅、スーパーなど明かりのあるところ）を、昼間と夜間の両方、写真に撮る。

明るい方同士、暗い方同士、マッチングさせる。

どれか一对の写真（例：昼間のコンビニ、夜のコンビニ）をテーブルに並べ、「あかるい」と言って昼間の写真、「くらい」と言って夜の写真を選ばせた後、

今度は「昼」と言って明るい方を、「夜」と言って暗い方を選ばせる。

「こっちは？」と聞いて「ひる」、「こっちは？」と聞いて「よる」と言わせる。

他の写真でも同じようにする。「いつ？」「ひる」「いつ？」「よる」

日常生活に般化。例えば昼間、窓の外を指さして「いつ？」「ひる」、夜、窓の外を指さして「いつ？」

「よる」と言わせる。

<朝>

朝と昼の区別は付きにくいので、「朝、起きてから園に行くまで」が「朝」と教えよう。

朝、起きたら「いまいつ？」と聞いて、子どもが答えるのを待たずに（答えさせたら「ひる」と言うはず）、すかさず「あさ」と言ってやり、まねさせる。

朝、食べるご飯も「朝ごはん」と教える。「朝ごはん」「昼ごはん」「晩ごはん」の区別が分かると、朝、昼、夜の区別も付きやすい。

<夕方>

「夕方」を教えるのはずっと後（5, 6歳?）でよい。昼と夜の境目の薄暗い時間をどう表現したらいいか、戸惑っているようだったら、「いまは夕方」と教えよう。

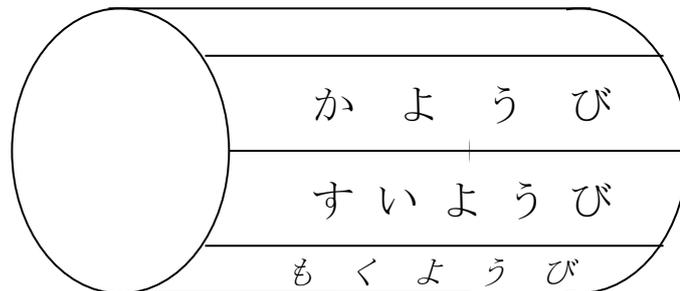
3. 曜日

4, 5歳になったら、曜日を教えよう。

まず「げつようび、かようび、すいようび・・・」という曜日の名前と順番を教える。（ここでは月曜日を一週間の始まり、日曜日を一週間の終わりとする）

「前と後（次）」の概念を使って、「げつようびの次は?」「かようび」「かようびの次は?」「すいようび」「すいようびの前は?」「かようび」などと答えられるようにしよう。

「にちようび」のあとは「げつようび」と教える。そのために、下図のように、曜日の表を輪にして、日曜日（週末）と月曜日（週初め）がつながるようにしておくとうい。



次に曜日ごとのイベントを表に書き込んで、イベントと曜日のつながりを理解させる。

げつようび	かようび	すいようび	もくようび	きんようび	どようび	にちようび
		プール		たいそう	マクドナルド	

4. きのう・きょう・あした

<きのう・きょう・あしたの順番>

「きのう」「きょう」「あした」のカードを作り、その順番を教える。

「きのうのつぎは?」「きょう」「きょうの次は?」「あした」「あしたの前は?」「きょう」「きょうの前は?」「きのう」

次に曜日と連動させる (右図)。

曜日表の適当な曜日に「きょう」のカードを置き、「きょうは何曜日?」と聞く。「○曜日」と答えさせる。

次に「きのう」カード、「あした」カードを「きょう」カードの前と後に置かせる。「きのうは何曜日?」「あしたは何曜日?」と聞き、答えさせる。

<朝になったら>

「朝になったら曜日が変わる」ということを教える。

曜日の表を冷蔵庫かホワイトボードに貼っておき、マグネットで「きょう」の印をつける。

「きょうは何曜日?」と聞いて、「どようび」などと言わせる。

朝になったら、子どもに、マグネットを一つずらさせる。「きょうは?」と聞き、新しい曜日を言わせる。

曜日+イベント表を見せながら、「きょう」=「○ようび」=イベントを結びつける

「きょうは何曜日?」「どようび」「土曜日は何するの?」「ドライブに行く」「きょうはどこ行くの?」「ドライブ」

	げつようび
きのう	かようび
きょう	すいようび
あした	もくようび
	きんようび
	どようび
	にちようび

					きょう	
げつようび	かようび	すいようび	もくようび	きんようび	どようび	にちようび
	ピアノ	おねえさん		おねえさん	ドライブ	

5. 時計

4, 5 歳になったら、時計の読み方を教えよう。

まずアバウトな「〇時」から。次に「〇時〇分」

教材

つみきの会の手作り時計教材「つみき時計」

普通の目覚まし時計

デジタルの置き時計

<〇時>

①「つみき時計」の長針を取り外し、短針だけの時計にする。

短針を数字に合わせて、「何時？」と聞き、「〇時」と答えさせる。

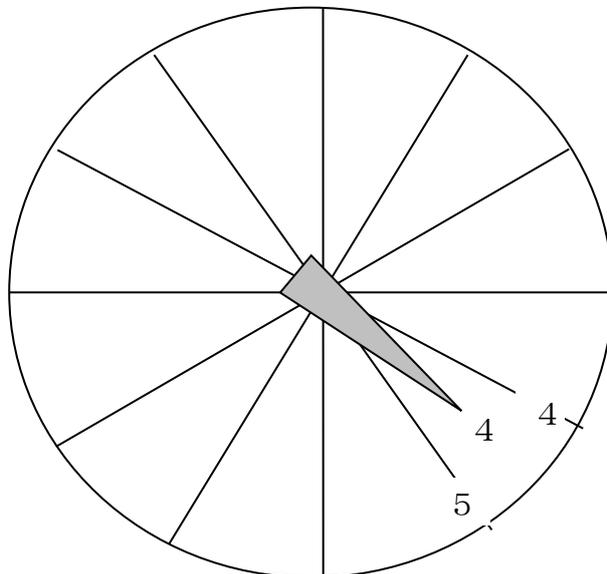
②次に長針を取り付け、12 のところに合わせる。「〇時？」と聞く。長針は無視して、短針の時刻を答えるようプロンプトする。

③再び短針だけにする。

例えば4時と5時の間の空間に鉛筆で薄く「4」と書く。そこに短針を合わせて、「何時？」と聞き、「4時」と言わせる。ただし真ん中より5に近いところは避ける。

④長針を取り付ける。長針が12以外のところ（例えば3）を指しているても、短針だけを見て、短針が4と5の間（4時半まで。つまり真ん中より4時寄り）なら、「4時」と言えるようにする。（4時半以降は当面、教えない。子どもが自発的に言い出したら、4時といっても5時といっても正解にしてあげる）

徐々に間の数字を消していく。



<時間の意味を教える>

時計だけ読めても、生活に役に立たなければ、仕方がない。

そこで、「〇時」と日常のイベントを結びつける。

①まずはおままごとから。

子どもの目の前におもちゃのプリン（あるいは本当のおやつ）を置いて、つみき時計か、普通の置き時計を見せ、「3時になったらおやつね」という。時計の短針を2時から動かしていき、3時になったと

ころで、「3時になった」と言わせる。「じゃ、おやつたべよう」といって、食べさせる（食べるまねをさせる）。

②デジタル時計で

デジタル時計で、例えば「3:00」が「3時」であることを教える（つまり左側の数字にだけ着目することを教える）

2:59に、「3時になったらおやつ」という。子どもを促して、デジタル時計を注視させる。表示が「3:00」に変わったら、子どもに「3時になった!」と言わせる。言えたらほめておやつを食べさせる。（最初は30秒くらいしか注視できないので、2:57から待たせたりせず、2:59から待たせる）

（デジタルの場合は、以下のようにいきなり分を教えた方がいいかもしれない）

<〇時〇分（デジタル）>

「〇分」はデジタルの方が教えやすい。

例えば「3:15」を見せ、「3時15分」と読むことを教える。

3:15のとき、「16分になったら休憩ね」と言い、子どもにデジタル時計を注視させる。

3:16になったら、「(16分に) になった!」と言わせる。立って休憩することを許す。

日常生活でも、「〇時〇分になったら〇〇ね」と言って、デジタル時計やテレビの時計表示を使って、子どもにその時刻まで待つことを教える。

<〇時〇分（アナログ）>

長針の読み方を教える。

つみき時計から短針を取り外し、長針だけの時計を作る。

時刻の数字の外側に、鉛筆で薄く、5, 10, 15, 20・・・と書いていく。そこに長針を合わせて、「5分、10分、15分、20分・・・」と5分刻みで読んでいくことを教える。

次に短針を戻し、短針に惑わされずに長針だけを見て、分を答えることを教える。

次に「何時何分?」と聞く。まず長針を指さして、「〇時」と言わせ、次いで長針を指さして、「〇分」と言わせる。徐々にプロンプトをフェーディングして、自分で「〇時〇分」と言えるようにする。

置き時計に般化させる。

6分、7分、8分、という1分刻みの読み方も一応教えるが、これは生活ではあまり使う機会がない。学校用である。したがって小学校に入ってから教えても遅くない。

<〇時半>

「〇時半」といういい方は、分を教えた後で教えた方がよいだろう。（つみき時計使用説明書では先になっているが、訂正する）

6. 日にち

曜日が定着してきたら、今度はカレンダーを使って、「〇日」を教える。

カレンダーに、子どもにとって楽しいイベントを記入する。

「きょう」シールを毎日、移動させる。「きょうは何日?」と聞いて、「〇日」と答えさせる。「何があるの?」と聞いて、イベントを言わせる。

日にちを理解したら、次は〇月へ。それから季節へ。最後に〇年へ（小学校に入ってからでよい）。